

家庭面での生活意識と生活条件（第3報）
 — 第2回調査の文・理・家政学部出身群別分析 —

大谷女短大 ○山田 光江 ・ 三木 栄子

目的：前報では質問項目の相互関連の有無数について家政学部出身群は文学部出身群と差があり、理学部出身群は家政学部出身群と似た様子を示した。そこで2年前の第1回調査で尋ね得なかった生活環境（条件）や生活意識について、ほぼ同一対象群に同一方式でアンケートを実施し、3学部全体の単純集計結果と2、3の項目の前回比較と全体についての項目相互の関連の有無について既に他誌に報告した。本報では出身学部別に前回と同様の検討方法で、家政学部出身群の特徴を検出し、前回傾向と比較しようとした。

方法：アンケートは'89.10.4 往復葉書各学部 500計1500通発送し、実質配達数1454通から得た回答900（文272.理304.家324）通について、出身学部別に単純集計結果の差の検討、回収率、各項目の他項目との関連の有無数を比較した。（検定は前回同様 $m \times n$ の χ^2 法）

結果：①単純集計結果の学部別で有意差の得られたのは、職業関係の2項目とキッチン主熱源（プロパンと都市ガスを込みにすると有意差なし）の計3項目のみであった。②回収率では前回同様、文学部の協力が少なかった。③各項目との関連の有無別では、質問内容が前回と異なるので、必ずしも同様の傾向が得られたとは云えないが、特に生活条件項目に同居者の有無を構成単位で10項目新設した処に文と理・家との差が検出された。また生活意識項目を家庭や家族に関わらざるを得ない群と、全く個人的な意識の群とに分けたり、老内容と日常茶飯事内容に分けて、出身学部別に若干の傾向を検出した。今回の調査を総合的にみて、家政学領域の教育内容が現段階ではまだまだ従来理学系に体質が似ているが、将来はなんらかの変貌が起こり得るのであろうか。